

2018年

1月1日
第310号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園
宮崎県児湯郡木城町椎木644番地1
〒884-0102 Tel 0983-32-2025

大家族主義

園長 児嶋草次郎

新年あけましておめでとうございます。昨年1年間、皆様方には大変お世話になり、子供たちを支えて下さいましたこと、感謝申し上げます。

暮れの12月24日には、友愛園の職員・子供たちみんなで石井十次墓地を掃除し、夜には、石井十次先生のお墓の前で、中・高生の子供たちは一人ひとり、大きな声で1年の反省と新年への決意を述べました。それらの声は、夜空の星々に反射しながら、深い森の木々にしみ入っていきました。

子供たち・職員、それぞれに新たな決意でスタートしています。社会的養護の世界は、グローバル化に翻弄され始めていますが、みんな日本の大家族の一員という覚悟で、その大波に向き合っていきたいと思います。今年も御指導・御支援、よろしくお願い致します。

以下は、12月23日、園のクリスマス会で子供たちに話したことです。

クリスマス、おめでとうございます。こうして、みんなでクリスマスをお祝いすることができることを、まず感謝したいと思います。誰に感謝するのか。天の神様に対してであるし、私たちより先に天国へ行った石井十次先生を始め、このみんなの運命を守ってくださっている天国の先輩諸氏や御先祖の方々であるし、この1年災害から守ってくださった茶臼原のこの大自然であるし、そして、現実的な今の生活を守ってくださっている国民の皆様方、さらに、色々な面で支えてくださっている多くの支援者の皆様に対してです。あまりに多すぎて一人ひとりの顔は思い出せませんが、平和にこのクリスマスそして正月を迎えられることを、皆と一緒に感謝したいと思います。

さて、この1年を振り返ると、悲しいこと、楽しいこと色々ありました。今日は三つの話をさせていただきます。

10月27日のはるなさんの死は、悲しい出来事でした。19歳。友愛園に来る前までは色々あったのかもしれないけど、ここに来て彼女なりに頑張り、大学進

学して、世のため人のためにと志を持って努力していたのに、なぜ神様は彼女の命を奪ったのだらうと、一時期は怨（うら）む気持ちも湧いて来ました。それから2ヶ月がたち、彼女はそういう宿命だったのだらうとも思えて来ています。

彼女は遠い奈良県で生まれ育ったのに、わざわざこの宮崎の私たちの前に現れ、6年間同じ仲間として生活しました。しかしなぜ、死という形で私たちの前から消えてしまったのか。彼女はどのような使命を背負わされてこの世に生まれたのだらうと思います。

もしかしたら、私を含めてみんなに何かを伝えようとしたのかもしれない。それは何だと思えますか。イエス・キリストが人類を導くために誕生したように、私たちに何かを伝えることを使命として、この世に誕生し、その使命を終えたのでこの世を去ったのかもしれない。

この世と天国との間には、手紙のやり取りも電話による交信もできませんので、今さら彼女に聞くわけにもいかない。私たちが想像するしかないのですが、彼女が死を通して私たちに伝えようとしたのは何だと思えますか。アレコレ考えるのだけれど、やはり葬式の時にも話した2点だと思えます。

一つは、やはり命のはかなさです。蚊がブーンと飛んでいて、両手でパチンとやればすぐに死んでしまいます。人間は虫などに比べると体も大きくて、なかなか死なないと思いこんでいるけど、死ぬときにはあっという間に死んでしまう。だから自分の命を粗末にしない、大切に生きる方をしなければならない。時々自分の体に傷つけたりする者もいるけど、死んだらもう二度とこの世にはもどって来れない。これからも命を大切にしてください。

もう一つは、志を持って生きることの大切さを教えようとしたのではないかと思えます。考えてみてください。親の言うことを聞かないからと、遠い県外の全く知らない人の家にあずけられたら、みんなはどのような反応をするだらうか。親に対してはもちろんすべての人間が信じられなくなって、世の中に徹底的に反抗するようになるのではないだらうか。彼女は小学校6年生の時に、突然に奈良県からはるか遠い九州宮崎の知らない人の家にあずけられました。そして、その知らない人の家も飛び出して、児童相談所のお世話で友愛社のじゅうじの家に来ました。その時点で家族との縁も切られました。手紙一通出すことさえ禁じられました。私も40年以上この仕事をやってきたけど、こんなケースは初めてです。

ここにいる52の子供たちそれぞれに、事情があつて家族から離れて生活しているわけだけれど、はるなさんほどつらい状態に置かれている者はいません。家族ということに関しては、ここに来てから6年間彼女には全く希望が見出せませんでした。彼女も、家族をすごく恐れていました。

じゅうじの家での生活では、最初の頃は、やはり人間不信が強いなと感じさせられる場面もありました。5年間彼女の指導をした保母の岩村さんも、色々と苦労したようです。はるなさんが変ったのは、高鍋高校に入ってからです。指導の厳しいボート部に自ら入った。精神的にもきたえられ、グングン成長していった。そして、大学に進学し、自分の夢に向かって自分の足で歩み始めた。

みんなには、ここの生活は運命を変える修行だと言うけど、まさに彼女のここでの生活は修行そのものでした。つまり、逆境からでも運命を転換することができることを、みんなに示してくれたのだと思うのです。学べきはここだと思うのです。みんながみんなここで素直に生活できているわけではない。特にグチや不満の多い者は、彼女の6年間の生活から学んでほしいと思います。そして、職員も一人ひとりの子供の可能性を信じることを、彼女の6年間の人生から学び、今後自らの仕事を見直し、後輩たちに伝えていくことも教訓として学ばねばならないと思います。

次は楽しい話です。ついこの前、12月16日に、宮崎市の生目の杜運動公園で開かれた施設対抗の駅伝大会で、友愛園は2年ぶりに優勝しました。この優勝から学んだことをここで話します。特に後半の、友愛園の姉妹園であり昨年の優勝した有隣園とのデッドヒートは、見ものでした。

勝因は一言で言うと何だと思えますか。「チームワーク」です。友愛園の場合、チームも応援団も心が一つになっていました。この子供も職員もみんな心をつにすという機会はめったにありません。久しぶりにそういう場面を見せてもらい、非常に感動しましたし、その感動を与えてくれた子供たち・職員たちに感謝もしました。友愛園に一体感が生まれたように感じましたし、誇りにも思いました。みんなもきっとそうだと思います。こういう一体感という心情は、大事にしなければなりません。こういう体験を重ねていくことで、自信も身についていくし、希望も生まれ、プラス思考に自分の気持ちを転換させる機会ともなります。

先ほどのはるなさんの話は、それぞれ一人ひとりの運命を変えるための話でしたが、この駅伝の話は、友愛園という一つの群れの運命を変えるための話です。この友愛園を誇りを持てるグループ・団体にしていくには、チームワークが必要だということなのです。労作教育も我々に誇りを与えてくれるものですが、誇りは与えられるだけではなく、自ら作り出していくものでもあらねばなりません。そういう意味では、今回の駅伝大会の優勝は、大きな価値あるものでした。

三つ目の話です。ここからは友愛通信12月号に書いたことと重なって来ます。その内容は、低学年の子供たちにとっては難しかったかもしれませんが、今話しても難しいかもしれない。

実は今、友愛園のような児童養護施設に対する国の政策が大きく変わろうとしているのです。みんなはそれぞれ、家から一旦児童相談所に行って、何日かそこですごして、友愛園に来ていますが、これからは、できるだけ施設ではなく里親さんの所にあずけようと国は考えています。イギリスやアメリカが児童相談所へ来る子供たちの70%以上を里親さんの所へあずけており、日本もできるだけ早くそのレベルにしようと考え始めているのです。ちなみに今は17%くらいしか里親さんにあずけていません。

「あたらしい社会的養育ビジョン」という厚生労働省が出した文書にそのようなことが書いてあり、日本中の児童養護施設では、子供たちは大丈夫なんだろうかと、大きな心配事になっています。家庭的な生活をさせてあげたいというのがそのビジョンのねらいですが、問題は里親さんの家に行ってもし相性が悪かったら、また他の里親さんの家へつれていかれたり、たらい回しになる可能性があるということです。施設だったら、担当職員と相性が悪かったら、他の職員に担当を変えることができますけど、里親さんの場合できません。よほど慎重に里親さんを選んでもらわないと、家にいた時以上に不幸なことになりかねません。

一番良いのは、再び家に帰って親と一緒に生活できるようになることです。しかし、どうしても家に帰ることが不可能な場合、どうするのがその子供にとって幸せな道につながるのか。慎重に考えてほしいと思います。

このビジョンで一番問題なのは、施設で生活することの価値をほとんど認めてないということです。施設生活は数か月以内とか1年以内とする、というようなこともこのビジョンには書かれてあります。つまり、一旦施設に来たとしても、その後すぐ里親さんの所に送られることになります。

施設で頑張って自分の志や夢を追う、自分の運命を変えるなどということが、ほぼ不可能となります。先ほどのはるなさんのように、つらい過去を転換して自分の夢を実現するための努力をしようとしても、それが報われない結果となる可能性が大となります。

確かに自分の家族と離れて生活することはつらいことです。しかし、その代償として、その代りとして、そのつらさを繰返させない、つまり連鎖させないための力をそれぞれが身につけるためチャンスが与えられないというのは、もっとつらいことになるのではないかと思います。

みんなは、ここで生活することで、生活習慣、礼儀、生きるための知恵、人間関係のあり方等を確実に見つけて来ています。大学への道も開かれています。表面的な「家庭」を体験させるという目的のためにそれらを奪われることは、許されてはならない。

先ほどの「新しい養育ビジョン」を作った人たちは、施設で子供たちが自分の夢や志を実現するために、どれだけがんばっているのか、ほとんど知らないのだと思います。施設の子供たちみんなが、劣等感を持ちマイナス思考で暗く生活していると思込んでいるのだと思います。あきらかに偏見です。

ここで先ほどの駅伝大会にもどります。「自分たちは施設でがんばっているのだ！」というアピールを世間に対し、どんどん発信していかねばならないということなのです。国の施策がすぐすぐ変わるわけではないでしょうから、中学生以上のみんなにはほとんど影響ないのかもしれませんが、幼児さん小学生のみんなの将来が未来がくずれないように、私は来年もみんなのためにがんばります。職員の皆さんも、そしてここにいる子供たちみんなも、ここでがんばっている姿を、あの駅伝大会の時のように、心を一つにしてしっかりアピールして行ってほしいと思います。来年がここにいるみんなにとって今年以上によくなりますように。